

---

# 僕らのキズナ

成宮春季

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕らのキズナ

### 【Nコード】

N5895F

### 【作者名】

成宮春季

### 【あらすじ】

乃碧・痲儒・香月・椿・星。五人は親友だった。星を殺した犯人は親友の中に居て…？乃碧は初めて人を疑う事を知る。相手は殺人犯。乃碧は無事犯人を見つけられるの…？

## 第一話 星

「香月！！！」

私 日向 ひなた 乃碧。

「ヒナ！！！」

あだ名は「ヒナ」。ひなた、だからヒナ。

「なんだア。香月にヒナじゃん。」

彼女は妃 き 椿。

冷静沈着な油断できない女の子だ。

「なんだアって…何？ 椿、香月じゃ不満？」

言い返しているのは、春名 はるな 香月。

「別に？」

ニヤリと笑う椿。

「もお！！ 椿ムカつく」

「何やってんだか…。」

クククと笑う彼女は、原谷 はらたに 麻儒。

とても優しいが、芯がちゃんとある女の子。

「麻儒！！ 聞いてよ！ 椿が！」

「なんもしてねエよ。黙れよ香月」

その二人のやりとりがとても面白く、私と麻儒は目を合わせてクスクスと笑ってしまった。

「っはよオざいまアす」

意味不明な挨拶を誰もいない教室に叫び、席にドスンと座る。

「意味わかんねエよヒナ」

クククと笑う椿の椅子をガタンと蹴り、提出物を教卓に置く。

「それ、今日提出だっけ？」

香月が筆箱を開けながら聞く。

「だよ、痲痺？」

コクリとうなづく痲痺。

とある席を見つめる。

「…ヒナ、やめろよ」

椿が悲しそうな目をする。

「忘れちゃ駄目なんだよ。」

ほし  
星の事を。

「…ヒナ、もういいよ…」

香月も真剣な表情で私を見つめる。

違う…

まだ、よくない。

星の事は…全く良くないんだよ…

「乃碧…やめたげて…」

痲痺が下を向きながら私に頼む。

「やめろって!!」

ドンッ

押される私。

「…っ」

椿がやってしまった、という表情を見せる。

「…ゴメンヒナ」

「星の事は…」

星の事は…

「忘れちゃダメなんだよ」

星……。

「チツ…なんなんだよ日向」

「…星の事まだ言ってるんだ？」

「お前も聞いてただろ！」

「…まア」

誰もいない食堂に”その人”は腰かける。

「…星を覚えてるのは、日向と妃と春名と原谷だけだよ」

「…うん、そうだね。」

チツと舌打ちする。

「ねえ…星<sup>ほし</sup>」

「何？ 月<sup>あかり</sup>」

「まだ…星の存在を消そうとしてるの？」

「当たり前。私は、私を覚えてる人物が憎いの！」

「…わかった。星がそういうなら、月も手伝うよ」

「ありがとう、月」

授業はたんたんと終わり、乃碧と痲儒は電車に乗り帰っていた。

「ねえ、痲儒」

急に私は切り出した。

「何？ 乃碧」

ニコリと優しい笑顔を振りまく痲儒。

「星が死んでから何年だった？」

痲儒の笑顔が急に固まる。

「…一年と2ヶ月」

星は約一年前

殺されたんだ

アイツに。

その事を私達は知らなかった。

星、あなたは今 天国で

私達の事を笑っていることでしょう。

僕らのキズナは

頑丈なように

とてももろかったんだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5895f/>

---

僕らのキズナ

2010年12月8日12時48分発行